ふるさと 霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと“風”

第119号（2016年4月）

風に吹かれて（97）

白井啓治

・清明の気に誘われ梅の実ぷっくりと青く

3月29日安全保障関連法が施行された。戦後維持してきた専守防衛を大きく転換させてしまった。多くの憲法学者に憲法違反と指摘されながら、時代錯誤も甚だしい憲法解釈の変更を押し通しての法案成立、そして施行である。

この重大事にあたってのマスコミ報道や識者論戦の不甲斐なさを見ていると、忌まわしい開戦の前と全く同じだと言える。せめて人間としての盾と鉾のあるべき姿についての論評・論戦ぐらいはと期待をしてみたが、紙面の片隅にちょっと載っている程度のものであった。テレビの報道に至ってはもっと酷いものである。

「戦争に行くのは自衛隊でしょ。私たちには関係ない」といった若者たちの声を流し、国民の多くのものが平和ボケしている、といったコメンテーターと称する者の声をかぶせて終わらせている。本当は、戦争は自衛隊がするのでしょ、という者の数は若者たちのごく一部の刹那的な思考しかできない者たちの声に過ぎないのであるが。

生物は、気象サイクルの乱れによってパニックを起こすようであるが、温暖化による異常気象に、日本人の多くがパニック症状を起こしているのかも知れない。特に、資質なき政治指導者や議員達の思考回路においては、それが顕著に表れているように思えるのだが。

我が家の柴木蓮が異常気象の影響で、昨年暮れ近くに狂い咲きを起こし、この春には花はつけないと思っていたのであるが、今花を開き始めた。わずか数カ月の休養で花をつけるなど、相当な体力消耗であろうと思う。この夏の気象条件にもよるが、枯れたりしないで何とか元気に生き延びてもらいたいものである。

さてこの会報「ふるさと風」も、今回で119号となる。来月で120号をとなり満10年を迎えることになる。その10周年を前に、駆け込むようにして新しく会員になられる方が来てくれた。しかも30台という若き女性である。これで当会も一気に平均年齢が下がる。嬉しい事である。数年に一人という実に牛歩過ぎる広がりではあるが七人の侍から、八人の侍となった。

この次に目指すところは、侍を捨てて「12人の怒れる男（者）」という事になるのだろうか。しかし、七人の侍も12人の怒れる男もいわば「怒りをこめて振り返れ」の年代の者たちの標語の様なもの、八人の会員になった所で、古き標語を捨てて「蛇にピアス」か「五体不満足」（いずれも古いと言われそうではあるが）とでも目指すべくあるべき姿を変えるのもいいだろうと思う。

小生などは「七人の侍」「12人の怒れる男」から抜け出す新しい力はもう乏しいが、想念の試行錯誤をすることぐらいの元気は残っていると思っているので、精々声に怒れる男を演じなければと思っている。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会は、今年の５月号で丸十年を迎えます。当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。
会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井　啓治　0299-24-2063　打田　昇三 0299-22-4400
兼平智恵子　0299-26-7178　伊東　弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会　http://www.furusato-kaze.com/

期待はずれの進化

菅原茂美

先月号で私は、この会報への投稿が、ついに100回目を迎えた…と述べた。されば、今月号は第101号。改まって特に、別世界を述べる訳でもなく、何も以前と変わりはしない。去年と今年。先月と今月。何一つ変わるものはなし…。

終始一貫して私が主張したい事は、人類はこれ以上、「偽の文明」を発展させ、環境汚染など愚行を積み重ねて、自ら種の滅亡を早めるようなアホらしい事は、いい加減止めようではないか…。この一点に尽きる。開けても暮れても、ケンカばかりしている人類の大脳進化に、些か、うんざりしているところ。

栄枯盛衰。盛者必衰は世のならい…とか。どんな生物も繁栄が永続するものではないし、いつかは滅び、それに代わって新たな「種」が繁栄する。その繰り返しが地球生命の歴史でもある。ならば人類は、与えられた「種としての寿命」を、素直に享受し、あえて自ら縮めるような愚行は、心底、慎むべきであろう…。この惑星に相応しい生き方を探索すべきだ…と、言い続けたいのである。

「時の流れ」なんてものは、そう簡単に変わるものではない。人間の営みに多少の変化はあるが、悠久の宇宙の「時」の移ろいから見たら、微々たるもの。逆らわず川の流れのように生きたいだけ。

※：去年（こぞ）今年　貫く棒の　ごときもの

誰かが元旦に詠んだ歌らしいが、時は、淡々と流れるもの。昨日の次は今日。今日の次は明日。その流れの中で、賢治じゃないが…

ミンナニデクノボウトヨバレ、ホメラレモセズ、クニモサレズ…私は、ゆっくり生きて行きたい。

＊

地球の生命は、今からほぼ40億年前、浅い海の底で誕生した。どこから集まったか知れないが、密度を増した有機物の塊に、薄い膜を被り、単細胞の原始生命が誕生した。その原始生命は酵素の活性などで、活発な活動を始め、新陳代謝をするようになった。周辺からエネルギー源として栄養になる物質を取り込み、体系を整え、「遺伝子」という設計図により、恒久的な「細胞」の形に成長。そうして細胞は、生命維持を続けていると、活性酸素などにより、大きなストレスを受け、傷つき、老化していく。それを若い細胞に置き換えなければ生命の持続ができない。そこで細胞分裂をして、若返った細胞同士は、原形質交換などして、細胞をリフレッシュする。コンピューターの初期化と同じ。これが世代交代の、リセットである。即ち子孫を残すための「生殖」のスタートである。「新陳代謝と生殖」これが生命活動の原則である。

こうして生命を持続するためには、周囲から栄養になるものを、取り込むシステムが発達する。ここに「利己的な遺伝子」が勢力を増し、まず生きるための「縄張り」を維持し、安定を得るための闘いを継続する。この繰り返しが、生命活動の原則として発達する事になる。

人類に争いが絶えないのは、原始生命誕生以来、進化の過程として、己の生存のために栄養を奪い合う「闘争原理」が働き、それが生命維持の原則として永遠に定着した。これが基本的本能である。人類は、他の動物とは明らかに区別される高尚な生物でも何でもない。なんの特別性もない。高貴な生物と考えるのは、ウヌボレ。

それが、いつの間にか人類は、神様の課長補佐ぐらいにのぼせあがって、「オレが秩序を創る…」みたいな行動をとり、環境を荒らし、資源を枯渇させ、絶滅危惧種を増やしていく乱暴を働く。

人類が、利己的な分不相応の「偽の文明」を発達させたために、根絶やしにされた生物は無数にある。歪に進化した人類というモンスターを、誰かが懲らしめないと、益々のぼせあがるに違いない。原爆など危険なオモチャ（２０１５年現在、全世界で１５・８５３発）を作り、保有を自慢し、見せびらかす幼稚でゲスな生き物。米ロを筆頭に、お隣のヘンチクリン総書記まで、現在世界に9か国もある。そんな輩を放置すれば、この地球は不毛の惑星となる。人類700万年の大脳進化の歴史は、私に言わせれば「期待はずれ」であった。

＊

さて霊長類として、アフリカで進化をとげた人類の祖先は、今から700万年前、大型類人猿（チンパンジー・ボノボ）とたもとを分かち、直立二足歩行する元祖「サヘラントロプス・チャデンシス（身長1㍍・大脳容量450㎖）」として、スタートした。それから化石人類は、およそ二〇代バージョンアップを重ね、ついに現在の、我々「ホモ・サピエンス（大脳容量１４５０㎖）」まで進化を遂げた。７００万年かけて、脳味噌を3倍に増やし、ケンカの道具を強化しただけ。情けなや人類。

ラテン語のホモ・サピエンスとは「叡智人」という意味だが、何か勘違いをしてはいませんか。叡智があるなら、こんな愚かな歴史を繰り返す訳がない。真に、のぼせあがった命名である。

ホモ・サピエンスは、「ホモ・エレクトス（180万年前誕生5万年前滅亡）」を親として、今から20万年前、アフリカで誕生した。その前に、アジアに

先住した「ジャワ原人（120万年前～70万年前）及び「北京原人（70万年前～20万年前）」は、いずれもアフリカから渡ってきたホモ・エレクトスである。いわばサピエンスの「おじ・おば」であり、我々サピエンスの直接祖先ではない。

さてアフリカで誕生したサピエンスは、親としばらく同居し、今から7万年前、恐らく気候変動による食糧難などを原因として、エチオピアあたりからアラビヤ半島へと歩を進めた。現在遺伝子解析などにより、その数は、凡そ150人くらいの集団であったと推測されている。これが現在世界全人類73億人の元祖である。勿論、全員黒人である。

それゆえ今日、肌の色による人種差別などナンセンスである。どんな人も、凡そ3千代遡れば、すべて黒人なのである。それを棚にあげ、白いのが黒いのを蔑視するなど、超ナンセンス。

アラビヤ半島に進出した黒人集団は、しばらく半島に停留してから、ややその近辺まで足を伸ばし、人口も1万人ほどに増えた。ところが、7万年前、インドネシアのトバ山が大噴火を起こし、成層圏まで舞い上がった粉塵は数年間も天空を覆い、太陽光は地上に十分に届かず、植物は枯れ、サピエンスも１０００人位まで減少した。10分の1である。危うく絶滅をまぬがれ、やっと天候回復し出すと、徐々に人口を増やし、それからは、各地へ驚異的なスピードで拡散していった。

それからの人類の足跡は、目を見張るものがある。まずアラビヤ半島から東方に向かい、インド・東南アジア・インドネシア方面へ進出した群は、スンダランド（ユーラシアと陸続きの群島）を経て、5万年ほど前までに、ついにオーストラリアまで、急速に脚を伸ばし、アボリジニとなった。アボリジニの「投擲（とうてき）狩猟用具のブーメランは、もし獲物に命中しなければ、手元に戻るという、その後の全人類がなし得なかった優れものの道具となった。

さてアラビヤ半島から、北方に向かった群は、中東あたりで2手に分かれ、一群は、ヒマラヤ高地を北周りでアジア深部に進出し、モンゴロイド（黄色人種）の基となった。その一部は北周りで、そしてヒマラヤの南周りで極東まで達したのが、我らが日本人の祖先である北方系・南方系の縄文人である。「遥かなる旅路」ご苦労さんでした。

広大な大陸を最北端の極東まで進出し、今から１５０００年ほど前、その一部はシベリアから、ベーリング地峡（氷河期のため、海水面は低いので陸続き）を経てアラスカに渡り、わずか千年ほどの間に、北米全土に広がり、あっという間に、中米地峡を渡り、南米チリまで進出した。好奇心旺盛な人類の面目躍如である。

そしてもう一方、中東から北西に進出した群は、現ヨーロッパに拡散。緯度が高いため、紫外線は弱く、メラニン色素が少なくても、ＤＮＡが破壊される事がないため、肌の色はだんだん白くなっていった。コーカソイド（白人）の誕生である。

ところが、大ハプニング。ヨーロッパに進出してみたら、なんとそこには、サピエンスより体格も大脳も大きく、肌は真っ白で、目の青い先住民「ネアンデルタール人（同じエレクトスからサピエンスより10万年ほど先に分岐した旧人）が既に住んでいたのである。兄貴分である。

サピエンスに肩を持つ現代科学者達は、最初、ネアンデルタール人を、野蛮で知能の低い、粗野な人種と決めつけ、そのために滅亡していった…と表現していた。しかし後、遺伝子解析技術が進歩すると、決して彼等は、サピエンスに劣る知能でも何でもない。クロマニヨン（サピエンス）の洞窟画と、ネアンデルタールの洞窟画に代わりはなく、死者に花をささげ、諸々の道具もサピエンスと殆ど変らない。歯石・骨格化石などから、食べ物もほとんど変わりがないことも証明された。ただ人口数が少ないため、圧倒的に数の多いサピエンスにより、混血吸収され、ネアンデルタールは3万年ほど前までにサピエンスに対し、遺伝子の2・1％ほどを残し、影を潜め、消えていった。北欧現代人の青い眼は、このネアンデルタール人からの贈り物とも言われる。

そうして人類は、各方面に分散していったが、離れれば、昔の同僚意識は薄れ、ついにはライバル意識が芽生える。どちらかが豊かになれば、負けた方がねたみを持つ。それが激化すれば、他の富を奪おうとして、闘いに発展する。人類から永遠にやまない戦争ごっこは、こうして永続する。業（ごう）のもの。未成熟の大脳進化。これが情けないけど、「人類の歴史」と言えよう。

＊

さて本論。人類の進化の結果が、なぜ期待はずれになったのか。

私は、進化というものが、どういうものであるかは、分かっているつもりであった。進化とは、生きていくのに都合のよい面が選択遺伝され、生存しやすくなる。ついついそう考えがちであるが、進化とは、世代を超えて変化が蓄積する事。ランダムな遺伝子の変化により、たまたま生存に好都合なら、生き残る確率がやや高くなる。不都合な遺伝が多ければ、生存確率は低下していく。

即ち、進化とは、「進歩」とは考えずに、単なる「変化」ぐらいに考えるのが妥当なようである。それは分かっているのだが、つい欲深く、万物の霊長とまで言われ、地球生物のリーダー的存在にまで地位を高めたのだから、人類には、もう少し、高貴で、モラル溢れた、いわば「神」に近い崇高な存在を要求したくなる。それなのに、いずこの民族・国家を見ても、個人は「オレさえよければ、それでよし」。これが私の落胆の原因である。

国家を見れば、いずこの首領も、「国益優先」。それでは狭量過ぎる。各国が己の国益優先ばかり唱えていたら、利害相反し、争いに発展するのは必至。一国の宰相ならもっと雄大なスケールで、「人類益」の推進とでも言える度量の大きさを示してほしい。それなら人類は簡単には滅びない。

なのに各国は体制強化に腐心し、国民個人の幸福追求よりも国家の強大化に躍起。即ち国家指導部の権力強化に重心を置く。それは裏を返せば、元首自身の「オレさえよければそれでよし」に還元される。偉い人は、コキタナイのである。蓄財など、醜い首領は、世界に、わんさといる。取り巻きも、うまい汁を吸おうと、べったりくっつき、おこぼれを頂戴している。

７００万年間に大脳を３倍に膨らました。メソポタミヤで農耕牧畜の定住を始めて１２０００年。「文明らしき物」を築いた。産業革命も起こし、生活物資は改良改善。食糧確保も、一部を除き、大方豊かになり、生活は極端に安寧に近づいた。

しかし、人は豊かになると、貧困時代に協力し合って、全体が運命共同体としての機能を背負っていた事を忘れる。我先の生存競争に、現（うつつ）をぬかす。ずる賢く、腕力の強い者が、我こそは「王なり」と、権力を振るいだし、平等は根から崩れていく。

＊

日本の縄文人は、狩猟採集の共同生活をし、定住を始めても、農耕牧畜はしなかった。それゆえ、採集した収穫物は、平等に分け合って、争いの少ない、温和な生活を営んでいた。

後に農耕を携え、大陸から大挙移住してきた戦争難民の「弥生人」は、たちまちこの日本列島で、大陸での敗者復活戦さながら。先住民を蹂躙し、権力闘争を繰り広げ、ずる賢く、腕力の強い者が、我こそは「王」なりと君臨する。でたらめな神話を幾多も残して威張り散らす。その子孫が、世も進み、20世紀にもなると、再び神話を持ち出し、天皇を神格化し、愚かな戦争へと繰り広げる。結果は見るも無残な敗戦。領土を失い、主権国家の姿も朧（おぼろ）げ。

さて一方、メソポタミヤで農耕牧畜の定住生活を始めた人々は、食糧の蓄えなど、汗水流して働いた人々よりも、権力者に富が偏る傾向が出来、不平等がはびこり、ついつい争いが絶えない集団と化していった。今日、西洋人の濃厚な個人主義の芽生えはその辺にあったのかな…と私は思う。食うか食われるか、生き残りをかけ、現今の経済界の醜い争いの起原は、その辺にあったのかと、つくづく思う。

リーマンショックなど、なりふり構わぬ経済界の戦争は、事件が起これば、全世界に大迷惑をかける。地球は一つ。なぜ世界はもう少し穏やかで、全ての人が平等で、この世に生まれた事を喜びあえる理想的な方角へ前進できないのか。何のために大脳をそんなに膨らましたのか。争いのない穏やかな人生がイヤだ…という人はいないだろう。甘ったれた夢を見るなと言われるかもしれないが、そういう理想を失えば、生きる気力がなえてくる。人類は進歩するために、あらゆる努力を続けなければ、ゴキブリ以下だ。平和に優る宝なし。

＊

しかし人類は、つらつら見ると、所詮、原始細胞が辿った、争って栄養を確保する「縄張り」拡張の呪縛から、逃れる事ができないようである。何億年経とうが、その原理は、厳然として子孫に受け継がれている。それがいけないとイキバッテみても、所詮それが人類の歴史なのである。どんな欠陥があろうとも、それもヒトに備わった、やむを得ない「習性」のようなものかもしれない。

人類に淡い夢を託し、期待する方が所詮無理だったのかもしれない。私のように、争いばかりを続ける人類を、箸にも棒にもかからぬ最低の存在…などと、なじってみても、エネルギーを消耗するだけだ。程良いところで丸くなれ！　と、世によく言われる通り、遠吠えの声も、多少工夫が必要なのかな…とも思われる。

＊

【遅ればせの初夢】：人類がトコトン進化すれば、生まれたらすぐ、今時のペットみたいに皮下にマイクロチップを埋め込むことが義務付けられる。チップは神経細胞と連携し、外部から来た音声など信号を電流に変え、脳神経に伝達する。脳はその信号を読み取り、最適の判断の下、体の筋肉を動かし、発声なり行動なりを命令する。チップは万能翻訳機能を持つ。どんな言語でも翻訳可能。会話はカンパツを入れず、すぐ意思疎通。望まないアンフェアーな要求などあれば、相手の神経回

路を衰弱させ、良好な意志回路に向き直させる。邪道な思考回路は、簡単に無能化される。

私がなぜこんな夢を見るかというと、最近日本中、あまりにも詐欺行為が多すぎる。こんな不逞の輩は、断じて許せぬ。日本も世界の二等国か。モラルの崩壊。それは国を滅ぼす。

マイクロチップは、悪人が除去手術すれば、必ず心肺停止になるようにプログラムされている。それゆえ、嘘発見器的なチップは、詐欺行為の思考回路を働かせれば、生理的にそれを読み取り、直ちに心肺停止にチップは作動する。個人の人格尊重など寝言を言っていては、平和は訪れない。これだけモラルハザードが蔓延しては、こうでもしなければ、人類の安寧な生活はできなくなる。

それゆえ、無謀な要求の想像をしただけで、チップのモラル回路のソフトがこれを遮断し、逆に強烈な電流を流し、激痛を与える。完全に機械が人格をコントロールする。闘争ホルモンを抑え、オキシトシンのような愛情ホルモンの分泌を促し、温和な人格に変更させる。行き過ぎた利己的な個人主義は、これくらいの機械コントロールをしなければ、人間という強欲モンスターは、目を覚まさない。これは、人と人が直面しなくとも、衛星回路でのテレビ会談でも通用する。戦争突入など非人道的思考回路は、こうして未然に防ぐ。世界に永遠の平和が訪れる。

更に世界のどこかで、ミサイル発射などあれば、宇宙管理衛星がすぐキャッチ。直ちにその火器を発射元にUターンさせ基地を爆破する。人間に智慧があるなら、それくらいの発明はすぐやれ！

生物学的「進化」は精神的「進歩」に昇華せよ！そうすれば人類は正に万歳！真の成熟社会が誕生する。これまでの偽の文明は姿を消す。人類の未来に栄光あれ！全世界の人々が、この世に生まれた喜びを、心から讃え合える日がやって来る。】

地域に眠る埋もれた歴史（13）　木村進

潮来と延方（一）

潮来から鹿島方面に少し行ったところに延方（のぶかた）という地域がある。今まで何度か車で通ったことがあった。また潮来の散策をしていて「延方郷校」の名前が何度か出てきた。そこで関連する場所などを見て回ったがそこには水郷潮来とは別な顔が見えてきた。そして水戸藩との関係や天狗党の悲惨な歴史などが浮かび上がってきた。余り悲惨な歴史は避けて通るようになっていたが、これもやはり歴史として認識しなければならないだろう。また北浦に沿って点在する寺院などにも目を見張るものが散見された。

○　二十三夜尊と延方郷校孔子堂

潮来から鹿島神宮に向かう途中、北浦の手前に延方という場所がある。前から気になっていた名前だが、先日、吉田松陰が潮来-牛堀から銚子に行ったことを調べていた時に、この潮来の地で「宮本茶村」という名前を見つけた。茶村は潮来村の名主であったが儒学者として名が知られている。松陰も鹿島から潮来経由で銚子に行った時にこの茶村や津宮（香取神宮の入口にある）の久保木清淵を訪ねている。この宮本茶村も久保木清淵（竹窓）もこの延方にあった水戸藩の郷校で教えていたという。そこで延方にあった郷校とはどんなところか知りたくなった。潮来というと水郷のイメージが大きいのでこの潮来とは別にまとめてみようと思う。

まずは今でもその建物が一部残されているというので潮来の街中にある「二十三夜尊」に行った。石岡にも二十三夜尊があるのでそれほど不思議にも思わないが、あまり他所にこのようなものは残っていない。

二十三夜尊堂：旧延方郷校の聖堂で孔子の教えを説いた「孔子聖堂」。

茨城県教育委員会の説明によると、「この堂宇は、茨城県における学校の始祖としてその偉容を誇った旧延方郷校の聖堂で、１８０７年（文化４）に水戸藩主徳川斉昭公が延方内田山に自ら篆書した「至聖先師孔子神位」の木碑を祀った建物であったが、１８７２年（明治５）廃校に伴い、１８７８

年（明治11）現在地に移建されたものである」と書かれている。

石岡の二十三夜尊の本尊は「勢至菩薩」であるというが、ここの二十三夜尊は「月読尊」だという。調べてみると二十三夜講（真夜中に出る二十三夜の月の出を待つ）での信仰対象は、仏教では勢至菩薩を、神道では月読尊を祀ったということのようだ。さて、この二十三夜尊がここでは安産・子育てにご利益があるとして祀られているが、これについては現地看板に、

「神社としての創建は貞享2年（1685）、月読命の分霊を勧請したのが始まりとされ、古くから神仏習合し月読命の本地である勢至菩薩が同時に信仰されました。勢至菩薩は二十三夜講の本尊でもあり、周辺住民の講中の拠点として信仰され、特に月読命は女神で勢至菩薩は女性的な印象が強い事から安産、子育て、子授かりに御利益があるとして女性から支持されました」と書かれてあった。

○　硯宮神社（頼朝が祈願文を書いた硯を奉納）

二十三夜尊堂の隣に「硯宮（すずりのみや）神社」がある。国道51号線を鹿島方面に向かい、潮来市役所を少し過ぎたところに「辻」という信号があり、そこを南に入って突き当った旧道沿いである。この硯（すずり）の名前は源頼朝が戦勝祈願の為に鹿島神宮に参拝した時にこの地で祈願文を書いたとされ、この時に使った硯をこの神社に奉納したという言い伝えが残されている。また、これを知った水戸光圀が「硯宮神社」と命名したという。元々は今宮八幡宮と言われたそうだ。このあたりは一体は水戸南領といわれた水戸藩の敷地で、黄門さんの領地でもあった。水戸南領は玉造周辺一帯もそうであったが、潮来との間には麻生藩があった。

水戸南領を取りまとめていたのは大山守であったようで、玉造の大場（おおば）家が代々水戸藩大山守をつとめていた。しかし潮来にきて牛堀の治水事業で知られる須田誠太郎氏の須田家もつとめていた時があったという記述を見かけた。大山守が良くわからず調べて見たがどうやらこの地方の20ヶ村以上にあった水戸藩の御立山（御留山）を管理するのが主の役目で、そのうち名主などを束ねて税の取り立てなどを行なっていたようだ。社殿は昭和54年（1979）に火災で焼失し、昭和56年に再建された。神社の入口には「茨城百景水郷潮来硯宮神社」の碑が置かれていた。

硯宮神社の裏手には「愛友酒造」という潮来では有名な酒蔵所がある。創業文化元年（1804）というのでかなり古い。無料で酒造見学なども年中やってくれるようですので潮来あやめ見物のついでにでも立ち寄って見るのもよさそうだ。この硯宮神社の隣が二十三夜尊で、その隣の空地に「津知村役場跡」と書かれた碑が建てられていた。この津知村（つじむら）は明治22年から昭和30年まで存在しました。明治22年前は「辻村」があったようです。この近くの国道51号線の信号名は「辻」です。

明治22年に辻村・築地村が合併して「津知村」となったが、この名前を検索すると神戸市芦屋に同じ津知村というのがあり、やはり辻村とも書いていたようなので名前の関連性がありそうだ。潮来のあやめ園に続く前川が近くを流れています。また硯宮神社のすぐ北側に地図に「鬼子母尊神社」という名前があったので寄ってみました。通りから少し入ったところにありました。由来やいきさつはわかりません。雑司ヶ谷の鬼子母神（きしもじん）が有名ですが、安産・子育てとして昔から信仰されてきたのでしょう。

○　内田山と延方郷校跡

水戸藩には藩校と郷校があった。

しかし各地を見ていくとどうもこの郷校がかなりの役割を担ったことを感じることができる。藩校は主に藩士とその子弟の教育機関であったが、郷校は庶民教育のために各地に設置され、全部で15ほどあったという。

その中で中心となった三郷校というのが小川の稽医館と湊郷校（敬業館）（ひたちなか市）とここ潮来（延方郷校）だという。この延方郷校の跡といわれる場所があまり良くわからず、まずは内田山の麓に建てられたというのでこの内田山を探した。調べると内田山には現在潮来高校があり、国道51号線の曲松信号に近い場所であり、高校への登り坂の途中に「延方郷校跡」の碑が立てられていた。そこから山をまくように田んぼのあぜ道を進むと郷校跡があった。山の麓にあり、現在は木々でおおわれており、目の前は田んぼが広がる。本当にここに芹沢鴨も学んだという延方郷校があったのかという思いがする。この学校には2000冊近い蔵書があり、当時としてはかなり大きなものだったようだ。水戸弘道館よりも30年以上前に設立されたという。文化4年（1804年）にここ内田山に孔子を祀った孔子聖廟廟（せいびょう）を建て、文化7年（1807）に大成殿が建てられた。

文化14年（1814）に水戸藩主「徳川斉脩（なり

のぶ）」親筆の「至聖先師孔子神位」の位碑（現在「潮来市立図書館」内の郷土資料室に展示）を納めた聖堂を建立した。

○　延方村役場跡と延方小学校

水戸藩潮来の延方にできた郷校は芹沢鴨も通い、宮本茶村や津宮（つのみや）の久保木清淵（くぼきせいえん）もここで教えていたという。蔵書の数もその当時では驚異的な２０００冊近くを誇った。その郷校も明治５年に延方小学校の分教場となったが明治10年に廃校となった。しかし昔の面影を探してもあまりにも何も出てこない。その原因が天狗党騒動にあるということに気が付くまで少し時間がかかった。

このような藩の建物や塾などは天狗党が集まっていた。しかし政府軍によりそれらが焼き討ちされて無くなってしまったということに私は思いをいたすことがすぐにはできないでいた。まず、何かあるかもしれないと延方小学校も少し見ておきたくなり探してみた。学校はもっと延方駅に近い場所にあった。

この学校が延方郷校を継承するものとして小学校になり、この現在地に移されたということのようだ。現地にはそれを示すものは何もなかった。小学校のホームページをのぞいてみた。

学校の沿革に書かれていた内容を転載しよう。

（沿　革）

文化の初めの頃　本校の前身の延方郷校，江戸より加賀藩士沢田平格氏をまねていて 内田山のふもとに塾を開く。

文化４年９月　水戸藩南領の郡宰小宮山楓軒，土地の父老と教育奨励のため，内田山に孔子の聖廟を建立した。

文化７年６月　水戸哀公の許しを得て，郷党より資金を集め藩の補助金と合わせて，豪壮な孔子覇を建て，周りに教場群を配し，聖堂学校の体制をととのえる。

文化14年３月　郷校聖廟内に，哀公筆聖碑が安置された。内容的にもっとも充実し，蔵書数は実に１，９６０冊に達した。

明治５年　学制発布により，郷校は廃止された。郷校は分教場の一つになり，郷校講師沢田平格氏はそのまま教師の辞令を拝命した。

明治10年10月１日　本校が現在地に設置された。明治19年までは郷校の先生，沢田平格氏の設けた干し飯倉を改築して教室にしていた。

手前の国道に平行に走っている旧道を東に進むと、延方相撲で有名な「鹿嶋吉田神社」の一の鳥居があるが、そこを少し東に行くと旧延方村役場跡の碑が目にはいった。現在ここは延方公民館となっていた。延方（のぶかた）村の名前は江戸時代から続いており、昭和30年に潮来町と合併した。敷地内には大きなクスノキ（潮来市指定天然記念物、樹齢は約200年）がある。

○　鹿嶋吉田神社

ネットで延方（のぶかた）と検索すると、たくさん「延方相撲」という言葉が出てきた。この延方相撲が行なわれている「鹿嶋吉田神社」へ行った。旧延方村役場（現公民館）の前の通りに一の鳥居があり、そこから桜並木の長い参道が延びている。訪れたのは桜が大分散り始めた時だ。この桜並木をしばらく進むと電車のガードをくぐり、二の鳥居が見える。鳥居の横に「鹿嶋吉田神社」と書かれた石柱がある。また、「県指定　民俗文化財　延方相撲」と書かれた看板も立っている。そしてまたこの桜並木説明文「ふるさと創生　桜並木」が書かれた碑があった。この題字は時の内閣総理大臣「竹下登」だという。そしてこの桜並木の説明によると、江戸時代には桜ではなく松並木があったという。しかし松の木は日露戦争の時に供出するために伐採されたという。そして桜が植えられて桜並木もできていたが、この通りが馬場となり、次第に荒廃してこの桜もすべてなくなってしまったという。それを「ふるさと創生」で昔の桜並木を復活させようと今のこの並木ができたということのようだ。この碑が建てられたのは昭和63年（１９８８）。それから今年で28年である。桜は20年も立つとかなり立派な並木になる。

東北の復興なども20年ほどで立派な花見もできるようになるのだと思う。神社は潮来二中の校庭に隣接している。社殿はまだ新しく、最近建て直したばかりのようだ。社殿の正面前には延方相撲が奉納される土俵がある。この社殿は平成26年６月に新築完成を祝って御神体の遷座の儀と社殿の竣工奉祝祭が行われました。

前の社殿はこの神社がこの場所に建てられた元禄年間の物だったのでしょうか。見ていないのでわかりません。さて、この神社は鹿島神宮の祭神である武甕槌命（たけみかずちのみこと）と．水戸吉田神社の祭神である日本武尊（やまとたける のみこと）である。名前の通り鹿嶋と吉田である。鹿島神宮は常陸国一宮であり、吉田神社は常陸国三宮である。

しかしこの神社の歴史を見て見ると少し不思議

な気がする。この地の北側に「古高村」があり、南東側には「洲崎村」という2つの村があった。この地が水戸藩の南領となって水戸光圀（黄門）がこの地の神社などの整理・統合行なったという。そして元禄9年（1696）に古高村の産土（うぶすな）様として祀られていた鹿嶋明神と洲崎村の産土神であった諏訪明神を合祀してこの神社を建てたらしい。この地の地名が新宮というのもこの意味でしょうか。

しかし諏訪神社はいつの間にか吉田神社となり祭神も日本武尊になった。やはり出雲系の諏訪神社と鹿島神社が一緒になるのはあまり見たことが無い。まあそんなこともあって水戸の吉田神社の祭神に置き換わったのでしょう。

しかし地元ではこの神社は今でも「すわ様」と呼ばれているという。江戸時代に、外浪逆浦と北浦に挟まれたデルタ地帯（徳島）あたりの領有権を巡ってこの延方村と下幡木村とが長い間争いを続けていました。そして江戸幕府から「水戸南領に属す」との裁定が下り、延方村の勝利となりました。この決定を喜んだ延方村の人々が、寛文13年（1673年）に、この神社に相撲を奉納したのが（県の無形文化財に指定されている）延方相撲の始まりだそうです。

この神社の祭事として古式にのっとり毎年7月末の日曜日に「二番勝負」「一番勝負」「新手二人がかり」、「小三番」「大三番」などの取り組み全48番が行なわれています。そして地元の子どもたちによる「花相撲」が行なわれ、親に肩車されて行列でやってきた小さな子供の相撲は実に微笑ましいものです。

（続く）

トムさんと百姓

にわやまゆみこ

地味なサンタクロースが親指をたてて立っていた。春の風が少し吹いたある日の午後、季節外れの彼をひろい、車に乗せた。

推定五十八歳。フサフサの白っぽい顎の毛をなでながら、私の隣で古い友のような空気をかもし出すこの人が〝トムさん〟だ。

アメリカの東海岸からやってきて、ここ二十年間は東京と茨城を往き来しながら百姓をしている。外国人が茨城で百姓をするには、年寄りからの当たりがきつく色々と苦労するらしい。

「まるで鎖国」と言っていた。

新しい提案をしても「昔からこうだったから」とはじかれる。〝別のもの〟を頑なに拒むアレはなんなのか。

発車三分後、トムさんが放り投げた議題を乗せて隣町の小さな農村を目指す。

「茨城もさ、新しい政策とか建物なんかもできたけど、そこにいる〝人〟が変わらないと、何も変わらないよ」

トムさんの言葉は、プレゼントの〝半額よもぎパン〟を添えて私の頭にぐるぐるとした問いを残していった。

「昔からこうだから」

その短い言葉の中には、先人の智恵がどっぷり詰まっている。そう、アメリカのインディアンにも似た。

そうしてきたおかげで守られてきたことがある。しかし、そのひとことから理解をするのはなかなか難しい。

「人が変わらなければ変わらない」

〝変わる〟こととはどういうことなのか。

〝変わる〟必要があることとはどんなことなのか。

ぐるぐるはさらに回転数を上げる。

トムさんは思い通りにならないことを嘆いているのではない。そんな無駄なエネルギーを使うことに発展が無いことなどしっている。

きっと、歩み寄ってもずっと背中しかみせてもらえないことに憤りを感じているだけだ。

ゴムボールは岩にあたるとはね返る。

岩同士は砕け散る。

ふにゃふにゃと柔らかすぎても潰れゆく。

〝変える〟とすれば、それは形ではなく〝質〟なのかもしれない。

龍神山の岩のように、変性作用を繰り返しながら古い粒、新しい粒が重なり合えたら、なんて素敵だろう。そうしてひとつの山に成れたらおもしろい。

真ん中は凹んでいるけれど…。と遠くをみた時、ぐるぐるはやっと動きを止めた。

愚痴を吐くトムさんの姿は、茨城の年寄り百姓にソックリだ！　どちらが岩なのかわからない。固くなったパンを頬張りながら思い出して笑う。

（また逢いたい。トムさんに）

県指定文化財（11）

兼平智恵子

只今石岡市ふるさと歴史館一階では第七回企

画展として「常陸国府と瓦塚窯跡」が行われております。（平成二十八年三月四日～五月二十九日迄）

瓦塚窯跡は石岡市部原（旧八郷）に存在する奈良・平安時代の生産遺跡で主として瓦を焼いていたところです。平成十九年度から継続的な調査で古墳時代の須恵器（大陸系技術による素焼き土器で良質な粘土で成形にはろくろを使用、あな窯を使い高温の還元炎で焼くため暗青色を呈するのが一般）窯一基、奈良平安時代の瓦窯三十四基、製鉄炉一基を検出する大きな成果をあげました。

律令時代と呼ばれた奈良平安時代の日本には約六十余りの国がありそれぞれの国に国府が置かれました。国府は国の役所または役所の所在地を意味し、この役所は現在の「県庁」に相当し、この国府が石岡市に存在していました。国府の中枢部である国庁の建物（石岡小学校敷地内）や、この時代に仏教の力で鎮護国家、無病息災を祈願するために建立された国分僧寺、国分尼寺などの建物に葺かれた瓦の工房跡が瓦塚窯跡となります。

八世紀前葉・中葉・後葉（百年間を三等分した年代を指し、八世紀前葉ならば西暦七〇〇～七三三年頃ということになります）、そして九世紀、十世紀と続いた瓦塚窯跡の窯の変遷で当時の国府の動向や国分僧寺・尼寺の創建や維持管理などの国の政策に触れることができます。

皆様の大切な余暇のひとときをいにしえ人々の大偉業と発掘調査に携わった職員の皆さんの労をねぎらいながらご高覧頂きます事おすすめ致します。

それでは二月の第一一七号に続きます、県指定文化財をご案内いたします。

○府中愛宕山古墳　史跡指定昭和四六・十二・二

府中愛宕山古墳はＪＲ高浜駅から北西方約五００ｍの台地上にあり、舟塚山古墳とは約三００ｍの距離をもって相対しています。

霞ケ浦に舟を乗り出す形なので「出舟」と称されることもあります。対して舟塚山古墳は入舟と呼ばれています。

墳丘は全長九六・六ｍ、前方部幅五七ｍ、高さ七・五ｍ、後円部径五七ｍ、高さ八・五ｍの舟塚山古墳群の中では第二位の規模をもつ前方後円墳です。

明治三十年、東京大学の坪井正五郎博士によって発掘調査が行われ無紋素焼の壺七個発見されましたが詳細は不明とされている。

また昭和五四年に古墳の周濠調査が行われ周濠の幅が一六～二四ｍの規模を持つことが分かり、円筒埴輪や形象埴輪片などが出土しました。

築造年代は明確でなく墳形や埴輪片などから、およそ六世紀前半と考えられている。

この古墳は、霞ケ浦周辺において、舟塚山古墳に次ぐ有力者の墳墓であると考えられています。

先月三月十一日かすみがうら市内の視察研修の折、講師のかすみがうら市郷土資料館学芸員、千葉隆司先生により、興味深い説明がありました。

○かすみがうら市柏崎、所在の富士見塚一号墳（前方後円墳）、墳丘全長八〇ｍ、幅一六～二六ｍの濠がめぐらされ、五世紀末～六世紀初頭に築造され、霞ケ浦を眼下に、富士山を望める景勝の地に。埴輪や装飾品の出土。

○行方市沖洲　三昧塚古墳、全長八五ｍ深さ二ｍの濠でめぐらされ、古墳の成立は五世紀後半と考えられ、馬型飾付冠、金銅垂飾付耳飾、平緑変形四神四獣鏡、他に短甲、鉄鏃、円筒・形象埴輪など、古墳文化を考察する際の重要な遺跡となっている。霞ケ浦沿岸の沖積地に営まれている前方後円墳。

○小美玉市高崎　権現山古墳、全長八九・五ｍ、築造年代は五世紀末から六世紀初頭、埋蔵施設は後円部墳頂と前方部墳頂の二箇所に存在。盾型の周濠を持つ前方後円墳。出土は埴輪、鉄製武器、土師器、須恵器など。霞ケ浦を望む大地縁辺に立地する。

以上の四古墳、いずれも霞ケ浦を望む景勝地、同時代に、四人の権力者か、果たして四人の王か。

悠久の時に想いを馳せる、古代ロマン訪ねてみませんか。

・今日こそは今日こそはウオーキング
　シューズ見上げてる　智恵子

人あるところに唄あり

伊東弓子

晩秋からこの一冬、私には胸が湧くわくするようなこともなく、惨めさの世界にどっぷり浸かっていた。今日は、と鉛筆を持っても一向に原稿が纏まらない。日が迫ってくる。気持ちは焦るばかり。「いずみ」との散歩の時もあれこれと考えてはみるが引っ張られたり止まったりで頭の中は空回

りしていた。歩に合わせて口遊んでいると「いずみ」もリズムをとって歩いている。陽射しの明るさに私の足も軽く進む。冷たい空気の中から僅かな暖かさをキャッチした花が顔を出した。香りが鳥を誘い、一羽が仲間を呼び、虫も蝦蟇も顔を出した。地面を覆う小さな花の群、一輪一輪が愛くるしい、と春を迎えた。

そうだ、私には唄があった。唄う時そこには人がいた。その人達と笑顔になり涙を流し力を与えて貰った、と思うと心が晴れ晴れしい。殻を破った思いの一瞬。

今、日本はきな臭い状況がある。私の生まれた年は昭和十五年（１９４０）、軍国主義一色の皇紀二千六百年。日本中がお祭り騒ぎでこの歌が流れていたとのことだ。

（天地輝く日本の栄えある光身に受けて～……～紀元は二千六百年、ア～・ア～）

時々唄ってみるがうる覚えになっている。父や母も若く、祖母や姉のいた頃だった。

（むすんでひらいて手をうってむすんで…）と手遊びをした時のことをよく覚えている。かつみさんが私の手の真似をしながらにこにこしていた。あの頃は私も笑いながら何の違和感もなかった。

六年生の時、暗い教室で放課後、きみちゃんとオルガンを弾いて「荒城の月」を唄った。三番四番の歌詞の意味ははっきりわからなかったが、覚えきるまでと毎日唄い続けた。日本の四季の美しさと人の世の歴史を感じながら歌の中に吸い込まれていく気持ちだった。壁にはバッハから十人位の西洋の音楽家の肖像画と共に、瀧廉太郎のものもあった。きみちゃんは明るい子で一緒にいると楽しかった。

（青いあの空　陽の光
胸のバッチの　うれしさよ
望はひとつ　明星めざし
今挙げりたつ　我らこそ
ああ我らこそ　先駆けて
未来を照らす　中学生　）

中学生になると田余第二小学校からの生徒と一緒になり人数も増えた。その中に目の奇麗なてるあきさんがいた。時々しか学校へ来なかったが、卒業と同時に東京へ行ってしまった。印象に残った友でこの歌と共に思い出す人だった。男性達は声も出さず、後ろを向いたり横座りして音楽の時間を過ごしていた。鐘がなると「あーあー」と終わった喜びを大きな溜息や声で表していた。逃げるでもなく邪魔するでもなく一応教室に治まっていた姿を思い出すと滑稽になり一人笑いをしているこの頃。

田舎から町での学び舎に通う頃は、英語の歌を歌っている友がいるのに驚いたが、臆することもなく慣れていった。入学試験の日に隣りに並んだかず子さんとは一生を通しての友となった。二人で晩秋の桜川を歩いて歌ったりして夢多い日々だった。

（白いあなたの　横顔
ひらりととんだ　蝶の影
秋の明るい　昼下り
野道の花を　摘みながら）

近所の小父さん達が集まって、酒を飲み交わし母の手料理を摘まみながら歌が始まる。大半が戦地を思い出し、友を偲び、箸で皿を叩いて音頭をとり、軍歌を唄っていた。忘れられない出来事を忘れたい。でも忘れてはいけないと唄っている様子だった。青い海、あの戦友、皆家族を守るために出ていったのだと涙を光らせて歌っていた。音楽専攻の組だったからあちこちの音楽祭に行ったり、歌の種類も幅広く教わった。高田保の記念碑が出来て、その除幕式で称える歌をうたった。当時は詳しい事もわからず歌っていたが、後で知る事になった。

社会に出ると同時に入院、そこで知り合った友と五年後に夢を託して退院した。将来に向かって日々努力。でも淋しい日々も続いた中で口ずさむのは「惜別の歌」だった。何度歌ったことだろう。会える日を励みとして頑張った日々だった。

仕事での憤りや行き詰まりは、歩く中で解消したり考えた。そこにはこの歌があった。

（石のお姿　観世音
ここにすみれが咲いている
しんと静かな　山の道
誰も通らぬ　山の道
石のお姿　観世音
そこを私が歩いてる）

テレビが家に入って間もなく「聖徳太子」の物語をみた。その主題歌だった。とても崇高な歌だった。「あざみの歌」「秋草の歌」他、乙女っぽい歌もその中に人を重ねて歌った。現実では先輩の人達と、芸者さんの歌、お酒の席での歌も楽しかったが、前向きの明るい歌がよかった。

地域をみんなで造り上げていこう。故郷を愛するみんなで育てていこうと「農山漁」の歌も唄った。

（話しもちより　ひとつにまとめ
暮らし豊かな　村づくり
ほんとどうだい　いい気持

外から内から　まあるめろ
うんとでっかい　農山漁　）

そして青年活動の中でも、みんなで大きな声で「朝鮮のうた」「ロシア民謡」「沖縄のうた」「労働組合の人たちの歌」「平和のうた」皆力を合わせていこう。将来に夢をもって進もう、と元気のよい歌声が日本中に溢れていた。声を出すのは元気の出ること。みんなで歌うことはより力が出て大きくなることだった。

保育の中でも子育ての中でも、日々歌と一緒にあった。畑道を行く時、畔を走る時、バスで出かける時、夕暮れの道を家路に急ぐ時、あんな日は二度ともどってはこないだろうが、母が沢山聞かせてくれたように、私も子供たちに沢山の歌を手渡した。母さんの出てくる歌が多かったがそこに家族も入れていった。

（春の雨こんこ　やさしいね
母さんみたいに　やさしいね…婆ちゃん
すみれたんぽぽ　れんげそう
かわいいねと　こんここんこふるよ
父さんみたいに　やさしいね…爺ちゃん
めだかふなのこ　どじょうのこ
おげんきねと　こんここんこふるよ　）

母が女学校時代（昭和元年～四年）に、音楽の先生が沢山教えてくれたそうだ。

「これからのお母さん達は子供に沢山唄ってやってほしい」との心を母は私たちに伝えてくれた。私は孫たちにも渡したつもりだ。

子供たちが独立し、孫の成長と共に自分たち夫婦の体や心から一つづつ何かが、失われていくように思えた。それを補うに唄った。夫は晩酌時軍歌を唄っていた。少年時代戦地に行く兵隊さん達を励まし、賛美していた大人達の真似をして見送った。元気づけるつもりだったが、深い意味も分からず自信をもって大声で唄ったという。

「しかし恐ろしいことをしてしまった。あの人達は帰ってこなかったんだから…」と涙を流して暫く沈黙が続いた。こんな宵を何度繰り返したことか。父と夫は時間差こそあれ、軍歌を通して複雑な日々への思いを綴っていたことだろう。あの傷は癒されることはなかったのだろうと改めて思う。

一人の生活の中で歌を唄うことがなくなったのに気がついた。老いからくるものか、口の中も声帯も動きたくなくなったのかな、と哀れさばかりにつなげてしまう。自分から何とかしようと「いずみ」との散歩の中で一人と一匹が共有する毎日の朝景色、今日の出来事などの歌を唄っている。この繰り返しから自然体で口遊むようになるだろう。唄っている一曲に、一詞に思いを馳せて私の思いも載せて生きる力の一つにしていこう。

消えた駅名

小林幸枝

図書館で本を探していて、「消えた駅名」という本を見つけた。面白そうだったので借りて来た。

常磐線の日立駅は、開業当初（１８９７年）は助川駅の名称であった。しかし、日立製作所の企業城下町として大きく発展したことから、１９３９年に現在の日立駅に改称された。

明治以前は、陸前浜街道の助川の宿場があった所である。日立の地名は、１８８９年の町村制施行の際に宮田村と滑川村が合併してできた日立村が始まりである。

１９０５年に久原房之助が日立鉱山を開いてから、日立の名は全国に知られるようになった。日立鉱山を開いてからは、精錬所をはじめ多くの工場が建ち、一大工業地帯となり、人口も急激に増え、１９３９年日立村は宿場のあった助川町と合併し、日立市となった。その時に駅名も日立となったのである。

日立駅の隣の常陸多賀駅もこの年に、下孫という珍しい駅名から変わったのであった。多賀地区も現在は日立市であるが、もとの多賀町は下孫、国分村などが合併してできたものである。

新しい市町村名のもとに歴史の面影を残す旧名が消えていくのは寂しいと思うのは私ばかりではないと思うが…。

【風の談話室】

《読者投稿》
私の国府巡り　番外「桜」

京都府精華町　今井　直

春が来た！どこもかしこも桜、桜、桜…。日本は確かに桜の国と実感する。桜は冬ごもりで委縮していた心を一気に解きほぐしてくれる花だ。春の宵、私はうつらうつらしながら、夢想にふけって……自分が撮った写真をいつかジグソーパズルの絵柄にできればなぁ……春爛漫の桜景色で三千ピースがよい、などとバカなことを考えている。昔、エポック社に注文して、三百ピースのパズル

を作ってもらったことがある。四国カルストの夏風景で気に入っていたから、額縁に入ったまま一度も崩してパズルとして遊んだことはない。この次は桜だ。周囲に笑われながらも、桜の絶景を追いかけ撮り溜めしている。

二年前にやっと満開の「臥龍桜（がりゅうざくら）」（岐阜県高山市）に出合えた。樹齢千百年余り、枝張り三十㍍、高さ二十㍍に及ぶエドヒガン（江戸彼岸）の一本桜で、国の天然記念物に指定されている。樹形を臥した龍の姿に見立ててその名がついている。その美しさを言葉でどう表現すればよいか思いつかない。ただ、いつまで見ても飽きることがないとだけは言える。JR飛騨一ノ宮駅のホームの傍にあり、車窓から花見ができるのもユニークだ。幾多の風雪に耐えてきた老桜を堪能し、駅を出て宮川を渡ると、飛騨国一宮である水無（みなし）神社。明治初期に、島崎藤村の父が宮司を務めた神社である。小説『夜明け前』の主人公・青山半蔵のモデルだそうだ。藤村の父も臥龍桜を見たはずで、その時彼はどう感じたであろう。

ほとんどが山林を占める飛騨地方は、日本列島のほぼ中央に位置する。JR高山本線を、飛騨一ノ宮から北上すると、高山、飛騨国府と続く。国府巡りをしている私には嬉しい駅名で、飛騨国分寺は高山駅に近い。しかし、観光客で賑わう宮川朝市に隣接する現国分寺に七重塔の心礎が残るだけで、古代の飛騨国に関しては不明な事ばかりだ。国分尼寺跡は発掘調査により一部確認されたが、現在は辻ヶ森三社の社殿が建っている。飛騨国府は地名のみで未だ遺構が発見されていない。飛騨国は遠い彼方に埋没しているが、いつか陽の目を見るのだろうか。

奈良時代、飛騨国は極端に過疎の地であったため、特例で庸や調の納税は免除されていた。その代り労役として、都での宮殿や寺院の造営に駆り出され、「飛騨の匠」という木工の技術集団を形成することになった。飛騨の山林には木工に適した良質な木材が豊富にあるという背景があった。その飛騨の匠の里が飛騨古川。伝統ある匠の技については、駅前の「飛騨の匠文化館」で詳しく学習できる。飛騨古川は飛騨高山と並んで小京都と呼ばれ、こぢんまりと趣ある古い町並みが残り、特に白壁土蔵街はしっとりとした情景がとても美しい。たくさんの錦鯉が泳ぐ小川に垂れ下がるしだれ桜の風情は、心に染みる一幅の絵画と言えよう。

今や、わが国の桜の約八割が染井吉野だそうだ。「枯れ木に花を咲かせましょう。パアーッ」と言いながら、灰を撒く花咲か爺さんの絵本も、咲かせた美しい花は染井吉野である。江戸末期に染井村（豊島区駒込）の植木屋が、オオシマザクラ（大島桜）とエドヒガンを交配し、「吉野桜」と名付けて売り出した。吉野山の桜は種類が全く異なるヤマザクラ（山桜）だから、完全なパクリだ。それで「染井吉野」と名を変えた。交配種の染井吉野は、種子では親の形質が必ずしも子に伝わらないため、挿し木か接木で増やすという。

染井吉野は花付きがよく、花弁が華麗で見ばえがよい。何よりも淡いピンク色が、春の到来を待ち遠しくさせる雰囲気を持つ。生育が早く十年も経てば立派な樹になり、若木から花を付ける。卒業や入学・入社など人生の節目の季節に、いっぱい咲くのも印象に残りやすい。人気が出るのも当然だ。もう一つ大衆ウケする秘密は、すぐに散ってしまう点である。散るときにハラハラと風に舞う花びらが美しいのも、日本人の好みに合っている。散る桜の潔さを称えた散華（さんげ）の美学は、武士道そのものだ。島倉千代子が唄う「やさしかった兄さんが…桜の下でさぞかし待つだろ」を聞くたびに、日本人ならグッと込み上げてくる。

明治以降、染井吉野は全国各地の城跡・公園・学校・寺院や道路沿いなどに植えられ急速に広まった。川岸に桜並木がよく見られるのは、花見客を呼び込んで堤防を踏み固めてもらうためだったと聞く。

明治時代、桜をこよなく愛したアメリカ人女性がいた。兄が領事館に勤めていた縁で来日したエリザ・シドモアである。紀行作家であった彼女は、向島（墨田区）で見かけた桜の美しさと、桜を愛でる日本人の花見という文化に深く感銘を受けたようだ。

彼女は母国の首都も愛する桜で彩りたいと思い、当局に植樹の陳情に奔走した。アメリカでは、チェリーといえば「さくらんぼ」で、絢爛たる桜花のイメージがなく、彼女は苦労を重ねた。二十五年後ついに、タフト大統領夫人の尽力をえて、彼女の夢が実現する運びとなった。ワシントンのポトマック河畔桜並木である。日米友好のために東京市長の尾崎行雄が桜の苗木を寄贈し、返礼としてハナミズキが贈られてきた話は多くの人が知っている。その陰でシドモアやたくさんの人々の熱意や苦心があったのである。

アメリカへ送る桜は、花の色・開花時期・寿命などを配慮し、染井吉野を中心に十一品種が選ばれた。明治四十五年（1912）、水苔と綿布で丁寧に包まれた約六千本の苗木が、横浜港から出荷された。アメリカに到着した苗木には、一本たりと

も病害虫が見つからず、検閲係官も驚嘆の声をあげたという。出荷と輸出業務を手がけたのは、「横浜植木」という１８９１年創業の老舗で、現在も国内外で活躍する総合園芸企業である。

通常、染井吉野の寿命は約六十年という。ワシントンでは常に手塩にかけて維持管理され、百年以上たった現在も、当時から生存している老木が八本あるそうだ。毎年、開花時期に行われる「さくら祭り」では、大統領夫人による植樹式や桜の女王のパレードなどがあり、六十万人もが訪れるという。

横浜山手の外人墓地に眠るシドモアの墓碑の傍らには、ポトマック河畔から里帰りした四本の桜が植えられ、「シドモア桜」と呼ばれている。この桜から接ぎ木してできた苗木が、各地に移植され脈々と受け継がれて、人々の目だけでなく心も楽しませてくれている。

見渡せば　春日の野辺に　霞立ち
　　咲きにほへるは　桜花かも
（万葉集 巻10－1872　作者未詳）

奈良県庁東交差点にある万葉歌碑で、古寺の礎石を模した石の上に建っている。「にほへる」は、ここでは嗅覚でなく視覚面で色彩がひときわ美しく映えるの意。碑面は『元暦校本』より採ったもので、「見渡者　春日之野邊尓　霞立　開艶者　櫻花鴨」と、誠に美しい万葉仮名で刻まれている。個人的に好きな歌のひとつだが、悪筆の私には、この奇麗な文字が羨ましくてならない。

古今・新古今で桜が盛んに詠まれたために、日本文学では花と言えば桜だが、万葉集では梅が百十八首で桜は三分の一の四十首ほどしかない。当時、唐の文化にかぶれていた貴族たちは、こぞって大陸からもたらされた梅を庭に植え、宴を催しては歌に詠みこんだ。梅から漂うかぐわしい香りは、おそらく貴族たちの鼻をくすぐったであろう。

庭木である梅に対し、万葉の桜は各地の山野で歌われていて、山桜のたぐいを指すとするのが一般的である。当然、この時代に染井吉野は存在しない。全国の梅の生産量の約六割を占める和歌山県など、関西には有数の梅林があり、今年も存分に観梅を楽しめた。しかし、梅花が桜花に比べて遥かに地味なのは、畑に植えられた梅林は梅の実の収穫が目的で、観賞用でないからだ。

奈良吉野山。誰もが一度は行って見たい日本一の桜の名所だ。しかし有名になったのは平安中期以降で、万葉集ではまだ歌われていない。吉野山の桜は七割以上が日本古来のシロヤマザクラ（白山桜）で、清楚な白い花弁と若葉が同時に開く。標高二百㍍から八百㍍の吉野山は、麓から下千本・中千本・上千本・奥千本と呼ばれるが、谷や尾根をうずめる桜の数は十万本を超えるといわれる。そして花期をずらしながら、さながら桜前線が山を登るように開花してゆく。

文禄三年（１５９４）、豊臣秀吉が徳川家康・前田利家・伊達政宗ら総勢五百人余りを引き連れ、中千本の吉水院で太閤花見の宴を催している。醍醐の花見など、秀吉がお花見という文化を根づかせたそうだ。秀吉の息子・秀頼にゆかりの、上千本にある吉野水分（みくまり）神社の枝垂れ桜を、見逃すわけにいかない。枝垂れ桜はまた糸桜とも言われ、きれいな呼び名である。楼門に足を踏み入れた途端、別世界に誘われた気持ちに変わる。本殿・拝殿・楼門・回廊が中庭を囲む姿は、桃山文化の特色を色濃く残し、神聖な雰囲気を漂わせている。右奥にある枝垂れの花弁は純白で小さく、背景の清楚な社殿とよく似合う。

吉野山で最後に桜が咲くのが奥千本。上千本口からバスに揺られて二十分、終点の奥千本口からきつい坂道を三十分ほど登ると、西行庵にやっと着く。桜をこよなく愛した西行が、庵を結び隠棲した静寂の地だ。急な傾斜面に林立する山桜は枝が箒状で、花びらは厚ぼったい八重と異なり、気品が感じられる。足をひきずってでも訪れる価値がある。

昔、吉永小百合主演の『時雨の記』という映画があり、ラブストーリィの佳作だった。亡くなった恋人（渡哲也）を偲びながら、小百合さんがこの奥千本を歩くのがラストシーン。ところが、撮影が季節外れだったのか、美術担当者がありったけの造花で飾りたてたので、すっかり幻滅してしまった。小百合さんにあのような下品な道を歩かせてはいけない。

最近、早寝早起きするようになって分かったことだが、早朝の桜は一段ときらめいて見える。夜桜がもてはやされるが、ライトアップされた桜は私には不気味でしかない。私は断言できる。朝日を浴びた桜ほど、品がよく美しいものはない！

敷島の　大和心を　人問はば
　　朝日ににほふ　山桜花

日本人の心とは気品のある美しさ――本居宣長。

江戸彼岸系は長寿の桜が多く、天然記念物に指定されている巨木がたくさんある。樹齢二千年の神代桜（山梨県北杜市）・樹齢千五百年の薄墨桜（岐阜県根尾谷）、樹齢千年の三春の滝桜（福島県三春町）が三大巨桜と呼ばれるが、残念ながら私はまだ満開のそれらを見ていない。

樽見（たるみ）の大桜も樹齢千年と推定され、兵庫県養父（やぶ）市の山奥にある。昔から「仙人の桜」と言われてきた超老木だ。ジグソーパズルの絵柄にならないかと、一昨年カメラ片手に出かけた。長年の風雪から樹勢が弱まり、大枝があちこちで枯れたり折れたり枯死寸前である。大雪や風から枝を守るため櫓が組まれ、たくさんの添え木に寄りかかって、見るからに痛々しい。それでも花をいっぱい咲かせ、「死ぬものか！」と叫んでいるではないか。その老木の立ち姿に、私は感動すら覚えた。すると突然、目の前で大桜が音をたてて崩れ落ち、満開の花びらがバラバラと、空から降りかかって……目が醒めた。春はやっぱり眠い…ふと見ると、テーブルの下にジグソーパズルの断片が散らばっていた。

養生日記

堀江実穂

病んでいく
健康だった学生時代
ジャズダンス・エアロビクス……踊りが大好きだった。
マドンナに憧れ、いつも鏡の前で曲に合わせて飛んだり、跳ねたりしていた。
スタイルも良く、レオタードも似合っていた。
学園祭では全校生徒の前で衣装を着て踊りを披露し、拍手喝采を浴びた。
自分はスター。アイドルだと思っていた。
あれから二十年以上経った今、体はぶくぶく太ってしまい、ちょっと動くだけで息が切れてしまう。四十肩で右腕が上がらない。
どんどん病んでいく体。災いの時がやって来た。
過去の自分を羨む日々。もう若かった時間は帰ってこない。
受け止めなければ。
現実を。

《風の呟き》
筑波嶺の教訓

打田昇三

百人一首にある「筑波嶺の峯より落つるみなの川恋ぞ積りて淵となりける」の作者は第五十七代・陽成天皇とされる。此の歌には「釣殿の御子につかわしける」とする副題が付いているように、相手に贈った恋歌である。
釣殿の御子とは第五十八代・光孝天皇皇女である綏子女王（母親は宇多天皇の姉妹）のことで、陽成天皇からは血縁的に父親（清和天皇）の従姉妹であるから伯母筋に当り、年齢も陽成天皇の一歳上とされる。絶世の美女と噂されていた。本来ならば天皇でも成就する恋では無かったのだが…
皇統の記録では、此の女性が陽成天皇の皇妃とされているから天皇の恋は成就した訳であるが「筑波嶺…」の歌が残されているところを見ると、二人が結ばれるについてはかなりの反対意見が多かったことが推測される。陽成天皇悪評の原因は「伯母への恋」に起因するのかも知れない。
此の天皇はどの記録にも悪行しか書かれていないが、実際には優れた人物であったと考えられないことも無い。其の証拠には自分から「私は天皇に相応しくない！」と宣言をして退位したらしい。自分の欠点が分かる人物が馬鹿や悪人である筈が無いと思う。現代は、選ばれた身でありながら善悪・適不適が分らずに他人から非難されて謝罪したり地位を失ったりする人物が多いので、苦労をされた陽成天皇からの忠告を紹介しておく。
「選ばれた椅子から落ちる皆の前
故意ぞ積もりて罪となりける」

「溜め山」（ためやま）

菅原茂美

溜め山とは、ウサギ・ネズミ・イワダヌキなど小動物が、自分の巣穴に、植物性の食糧・敷き藁・外敵防御用の「山」などを築く。それが気候変動等で地上が乾燥化→砂漠化などすれば、極めて良好な状態で何千年も保存されている。植物の種類は何百種にも及ぶ事があり、現在それを発掘・分析し、何万年も前の環境状況が、手に取るように解明されるのだという。
一方「放射性炭素年代測定法」という方法により、その動植物が生きていた年代が測定できる。大気中の窒素が宇宙線の照射により、炭素14という放射性を帯びた物質に変わり、一定濃度で存在する。その生物が生きていれば、体に大気と同じ濃度の炭素14が存在するが、死ぬと取り入れた炭素14は５７３０年の半減期で崩壊していく。従ってその遺体に残された炭素14濃度を測定すれば死後何年経過したかが明確に分かる。
このようにして、何千年・何万年前の、自然環境や生態系が、かなり明確に分かるようになってきた。現在砂漠化した古代文明など、これらの手法で、衰退の経過が分かる。即ち、大河が氾濫すれば、上流から流れてきた肥沃な土壌が、多くの

人口を養うことができる。人口が増えると、建築や燃料として森林が伐採される。山が裸になると保水力がなくなり、表土は流出。不作が続く。おのずから人口は減り、都市は見捨てられる。世界の多くの古代文明衰退は、森林伐採が主な原因らしい。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第四 - （二 - 2）

競（きおう）のこと

一字しか無い表題で無愛想ながら是は途中から登場して此の章段で活躍する人物の名前である。「渡邉競」という、嵯峨源氏・源融（みなもとのとおる＝嵯峨天皇皇子で臣籍降下、左大臣、贈正一位）の子孫である。源氏でも一字名は嵯峨天皇系源氏の特徴と言われている。嵯峨天皇には本人も分からないほど大勢の子が居たらしく（養鶏場の雄鶏と同じで、さぞ、忙しかったと思うが…）名前も一字にしないと間に合わなかった？常陸国で平国香を巻き込んで平将門事件を起こした常陸大掾の源護も其の一員であったろうか。

渡邉一族は、源融の三代目が東国に赴任して五代目が幼時に母親を失い伯母に引き取られて摂津国（大阪北部など）に定着したと言われる。渡邉一族は早くから清和源氏に従属しており、一条堀川戻橋で美女に化けた鬼の腕を斬り落とした渡邉綱（前太平記）などは、源三位頼政の四代前（源頼光）に仕えて四天王の一人に挙げられていた。この章段に登場する「渡邉競」も祖先に負けない豪の者なのである。

さて、長信連の機転と勇気により平家の追っ手を逃れた以仁王は高倉小路を北へ行き、近衛大路から道を東にとって賀茂川を渡り、鹿が谷経由で東山連峰の如意岳（東山連峰の主峰）へ入った。かつて天武天皇が吉野に逃れた際に（壬申の乱で弘文天皇と対立し）女装して難を逃れたと言われるが今の以仁王の状態は其の場合と同じである。

なお日本書紀では天智天皇からの譲位申し出を断って自ら吉野山中に入ったことになっていて此の（平家物語の）記述は違うとされる。つまり天武天皇は自らの意思で吉野へ隠れたのであり、以仁王のほうは逃げ場が無くて山に入ったのである。

逃げたことには変わりないからどうでも良いが…。

兎に角、以仁王は必死で山中を逃亡したのであるから、足は傷つき血は流れ、夏草の露に濡れて、さぞ辛かったことであろう。こうして、ようやく明け方になって三井寺に入られた。

この時に不貞腐れて言ったのかどうか以仁王は「私など生きていても仕方がないのだが、未だ死ねないから僧兵の皆さんに助けて貰おうと此処にきたのである…」と、正直に打ち明けたから、僧兵たちも同情して法輪院という僧坊に仮の御所を拵えて取り敢えず食事を出した。

一方、都では四月十六日に「高倉宮（以仁王）が平家に謀反を起こして行方不明になった…」という噂が広がったから都の人たちは不安になって、「合戦でも起こるのか？」と騒いでいた。此の情報を耳にされた後白河法皇は「私が鳥羽殿を出られたのは喜び事であったけれども、陰陽師・安陪泰親が占いの文書で“嘆き事”と言ったのは、是であったか！」と落胆して言われた。それを考えると源三位入道が、其れまで何事も無くていたのに、此処に来て急に謀反を起こしたのはなぜかと思われるが、実は是には理由が有ったので、平家の次男（実質上の後継者）である前右大将の宗盛が、してはならない事をしたからである。理由も無く、その様な行為をしたり、言ってはならない事を言うのは、よくよく慎むべきことである。

頼政の謀反の理由については「源氏揃」に概略を記したように一頭の名馬が原因になっている。鹿毛（かげ）つまり鹿の様に茶褐色で鬣（たてがみ）、尾、脚などに黒色がある馬で群を抜いて優れた名馬を頼政の子・仲綱が手に入れた。「木の下」と名付けていたのだが、それを知った平宗盛が仲綱に「見せろ！」と申し入れたところ「実は少し怪我をして田舎の病院で入院中」と断った。ところが平家の部下たちが、その馬は、昨日も元気でいました、とか、一昨日まで見かけました…などと告げ口をしたため宗盛が怒って、手紙で正式に「馬を差し出せ！」と命令して来た。

父親の頼政が心配して、止むを得ないから此処は我慢して（馬を）平家に渡すように言ったので仲綱は「恋しくば来ても見よかし身に添える影（鹿毛）をば如何が離ちやるべき」と、歌に心中を託して名馬・木の下を手放したのである。本来ならここで宗盛も歌で応答すべきなのだが、思い上がっているから「馬は名馬だが、主の仲綱が惜しむのが憎い！」と勝手な事を言い木の下に「仲綱」と焼き印を押させ、そして会う人ごとに馬を見せ「仲綱」と呼んで侮辱したのである。

是を知った仲綱は、権力で名馬を取られるのも悔しいが、馬の為に侮辱されるのは許せない！と思い、父親の頼政も「其処まで平家に馬鹿にされたのでは武士として我慢がならないから、機会を狙って平家

に抵抗しようと思い立った（以仁王に決起を要請した）と言うことである。此の話は後に知られたことであるが、この出来事につけても思い出されるのは先に平家の嫡男であった今は亡き小松殿こと平重盛公のことである。（重盛の死により平家頭領となった愚かな宗盛と比較して）

　或る時に小松殿が高倉天皇中宮・徳子の許を訪れたときに三メートルに近い長さの蛇が重盛に引っ掛かった。慌てた蛇は逃れようとして袴の裾に絡んできた。此処で騒げば女房たちも騒いで中宮を驚かすことになるので、重盛は左手で蛇の尾を抑え右手で頭を押さえてから直衣（のおし＝制服の袖に蛇を）隠し持ち、さっとその場を発って「六位の者は居るか…」と声を掛けられた。

　天皇の近くに奉仕する「蔵人（くらんど）」と呼ばれる武士は原則として五位なのだが、一部は六位から選ばれて下請け業務に従事する。その頃に源仲綱は衛府蔵人（えふくらんど＝警護役を兼ねた天皇近侍役）として勤務していたが、重盛に呼ばれて「仲綱です」と答えて出て来た。重盛は仲綱に蛇を与えて立ち去った。海老ならば兎も角、蛇を貰っても仕様が無いが、仲綱は蛇を持って清涼殿の後に在る校書殿という建物から下に降り殿上の小庭に出て、近くに居た倉庫係の下級役人に「是を捨てよ」と言って蛇を渡そうとした。驚いた役人は慌てて逃げ去ったので、仕方なく自分に仕えている瀧口（宮中警護の武士、清涼殿近くの雨水の溝＝瀧口の近くに詰め所が在った）を呼んで蛇を放逐させた。其の時に（不運にも）蛇を預けられたのが渡邉競なのである。

　一匹の蛇で騒ぎ過ぎるような気もするが翌日、小松殿が立派な馬に鞍を付けて引かせ、仲綱を呼んで「昨日の蛇事件の処理は適切であった。其の褒美に此の馬を与える。是は乗り心地一番の馬であるから、もし愛人の許に通う時などに乗って行くが良い」と言われた。仲綱は相手が大臣であるから、すっかり恐縮して「有難く頂戴致します。私の昨日の振る舞いは還城楽（げんじょうらく＝シルクロード地方で現地人が蛇を捉えて食べる様子を擬した舞）に似ていたでしょうか？」と答えられた。この様に、小松大臣は立派な振る舞いをされた方なのに、弟の宗盛卿は（大臣でも）それ程の人物では無かった…のは仕方が無いとしても他人が大切にしている馬を強引に奪い取り、それが原因となって天下の大事（反平家運動）に至らしめたのは愚かなことである。

　既に述べたように、治承四年四月十六日の夜には源三位入道頼政、嫡子・伊豆守仲綱、次男・源大夫判官兼綱（「信連」の章段で、一応は平家方として登場した）、八条蔵人仲家（木曾義仲の兄で頼政に養われていた）、其の子・蔵人太郎仲光以下、三百余騎の源氏勢が館に火を掛け、すっかり焼き上がるのを確認してから消防署に通報し、それから三井寺（琵琶湖畔）に入ったのである。

　其の時に、蛇の事件で登場した渡邉競（正式名称は「渡邉の源三瀧口競」という）は、少し来るのが遅れたので、一行の後を追わずに取り敢えず火事場の後始末などをしていた。それを平宗盛が知って「其の方は、源氏ゆかりの武士なのに、どうして（頼政と一緒に）行かなかったのか？」と質問した。競は畏まって次のように答えた。

「主人の家に起こった不慮の出来事であれば、真っ先に駆け付けて命懸けの御奉公をしようと日頃から思っておりましたが、どういう訳か、今回のこと（謀反）については、（主の頼政が）何も言って呉れませんでしたから、私はどうして良いか分からないのです…」

　宗盛は「其の方は朝敵となった頼政の家臣ではあるが、間接的には平家の家来でもある。是から頼政の許に行きたいのか、それとも残って平家に仕えたいのか正直に希望を述べよ…」と言ってくれた。競は感激した様子で、ハラハラと涙を流し「源氏には先祖伝来の縁はありますが、この度は（主人の頼政が）朝敵となってしまったのですから（その上に私は取り残されたのですから）今さら源氏方へは行けません。此の侭、此方の殿中に（平家に）御奉公させて下さい…」と頼んだ。

　宗盛は「それならば平家に奉公せよ。給料、諸手当など源氏（頼政）が払っていた以上の処遇はしてあげよう…」と言ってくれたので、競は派遣社員から平家の武士に格上げして貰った。宗盛は上機嫌であったが調子が良すぎるので少し心配になって、武士たちに「競は居るか？」と何度もチェックをさせていた。競はその度に其れに応えて「此処に居ります」と忠勤に励む様子であった。

　日が暮れて宗盛が武士の詰所に来てみると競が畏まっていて真剣な顔で言った。「三位入道殿（頼政）は三井寺に逃れたと聞きました。平家から追っ手の軍勢が差し向けられることでしょうが私のことも是非、追っ手の軍勢に加えて下さい。相手は恐れる程の勢力では有りませんが、三井寺の僧兵たちが私を見て“渡邉党なのに平家に加担している”と言って、一騎討（組討ち）などを要求して来るかも知れません。然し、私は馬が有りません（三井寺に行った連中に盗まれてしまい）そこで、お馬を一頭、頂戴出来れば合戦でも縦横の活躍が出来るのですが…」

　是を聞いた宗盛は「尤もなことである」と白葦毛（しろあしげ＝白い毛に少し黒毛が混じった）の馬で「南鐐（な

んりょう）」という秘蔵の名馬に上等の鞍まで付けて与えてくれた。すると渡邉競は南鐐に乗って自分の館に戻り妻子たちを各地に逃がしてから「ようやく日が暮れたから此の馬に乗って三井寺へ向かい源三位入道殿の陣に加わり（平家が攻めて来たら）真っ先駆けて討死しよう」と悲壮な決意を固めたのである。

競は出陣の衣装として色替わり文様の狩衣（制服に菊花状の飾りを付けたもの）を身につけ先祖から伝わった鎧に銀メッキ鋲を付けた兜を被り、頑丈そうに拵（こしら）えた太刀を持ち、背には二十四本の矢（「大中黒」と言って白い羽の中央を黒く塗り分けた矢）を負い、現職であった瀧口（清涼殿近くに詰める武芸に長じた武士）の礼義作法を忘れぬようにと二本の的矢を加えた。そして黒漆塗りの弓を持って、平宗盛から貰った（正確には騙して手に入れた）名馬・南鐐に跨り、人数は少ないが家臣に乗換用（予備）の馬などを引かせて三井寺に向かったのである。

その際に館に火を掛けたため、平家屋敷では渡邉競の屋敷が火事だ！というので家臣たちが騒ぎ出し、それを宗盛が聞いた。宗盛は火事場に家臣を派遣して探させたところ誰も居なかったので怒りまくって「さては騙されたか！直ぐに追っ手を差し向けよ…」と命じた。平家の手勢が後を追い間も無く追い付いたけれども、なにしろ渡邉競は豪弓で知られた武士である。文字通り矢継ぎ早に矢を放ったから、計算どおり二十四本の矢で二十四人が射殺された。平家方の武士は恐れて「静かに隠れて居よう」と相談して手向かいを止めた。

一方、三井寺の方では渡辺競が居ないので身内の者などが「競はどうしているであろうか！声を掛けて誘ってくれれば良かったか…今頃は平家に捕らえられ、酷い目に遭わされているのではないであろうか？」などと噂をしていた。それを聞いた源三位入道頼政が、競のことを良く知っているので「競のことは心配いらない。無闇と捕えられたりする人物では無い。源氏に志の深い者であるから、間もなく此処へ来るであろう…」と言いも終わらぬうちに、競が現れたので一同は「成程！」と感心をしたのである。

頼政に到着の挨拶をした渡邉競は改まって「実は…」と平家方から連れてきた名馬の南鐐を見せ「伊豆守殿（仲綱）が（平家に取られた）木の下代わりに六波羅の名馬・南鐐を奪って参りました」と仲綱に献上した。仲綱は大いに喜び、平家が木の下にしたことの報復措置として、南鐐の尾と鬣（たてがみ）を切り、焼き印を押して平家屋敷にそっと送り返した。気付かれないように門内へ放ったのであるが人間同士の争いに巻き込まれて焼き印を押される馬は気の毒と言う他は無い。

平家屋敷に居た馬たちも、夜中に火傷をした南鐐が帰ってきて厩（うまや）に入ったので寝ていた平家の馬と寝床を巡って喧嘩になった。馬係が驚いて宗盛に報告したから、灯りを点けてみると南鐐の身体に「昔は南鐐、今は平宗盛入道」と文字が焼き付けられていた。宗盛は怒りまくって「実に腹立たしい競め！油断して騙されたことは無念である。三井寺に押し寄せた時は、どの様にしても渡邉競を捉え、鋸（のこぎり）で首を切らずに置くものか！」と大地を踏み抜くほどに怒りまくったけれども、斬られた南鐐の尾や鬣も元通りには伸びず、焼き付けられた痕（文字）も消えることが無かったのである。

山門牒状（さんもんちょうじょう）のこと

本来は俗人の見本になるべき宗教界というのは全く反対で、思い込みの世界であるから自我が強く、自分だけが特別だと錯覚している。仏教でも釈迦は一人しか居なかったのに、その教義を伝える宗派が数え切れないほどある。尤も「天上天下唯我独尊」と言ったのはお釈迦様らしいから万人が「…我、一人尊い」と思っていたのでは纏まりの付く筈がない。お釈迦様も大衆のレベルを過大に見て余計な事を言い残したものである。

この章段の題名は「山門牒状」、山門とは是までに何度も登場した天台宗の本舗、つまり比叡山延暦寺に巣食っていた連中のことである。山門に対して近くに在った三井寺の僧を「寺門」と言い同じ宗派なのに犬猿の仲である。是だけでも当時の坊主が仏教とはかけ離れた存在であったことが分かる。それは兎も角、平家打倒の花火を景気良く打ち上げた源三位頼政であったが、零細企業の悲しさで、あっと言う間に平家軍に蹴散らされて逃げ込んだ先が三井寺なのである。

やがて、担ぎ出された以仁王も三井寺に来たから僧兵たちの意気が上がり、法螺貝（ほらがい）を吹き鳴らして決起大会を開いて次のような決議をした。

「近頃の世情を見るに仏法は廃（すた）れ―（其れは自分たち僧兵の所為なのだが、それには触れずに）―王法は衰えている。此の時に当り平清盛の非道の振る舞いを正し、平家の悪行を懲らしめる時期は今しかない。此の度、高倉宮以仁王が三井寺に入られたことは、正に八幡大菩薩の御加護であり新羅大明神（三井寺の祭神・素盞嗚尊）のお助けによるものである。天地の神々や仏たちも、味方して下さり、その威力で敵を屈伏させて下さるであろう。そもそも比叡山延暦寺は天台宗の学びの聖地であり、南都（奈良）興福寺は僧侶

に資格を与える戒壇の場所である。当方（三井寺）から平家追討の協力依頼をすれば、必ずや協力をしてくれるであろう」その様に議決をし、比叡山と奈良とに公式の依頼状（平家追討軍への参加要請）を送ったのである。延暦寺に送った書簡は次の様な文面であった。

園城寺から、延暦寺事務所へ（拝啓）

どうか三井寺にご協力を頂き、当寺院の危機を救ってください。

平清盛入道が我欲に依って仏法を滅ぼそうとしていることは御存じの通りであり、誠に嘆かわしいところですが、実は去る十五日の夜に後白河法皇の第二皇子である以仁王が（反平家運動に敗れて）密かに当寺に入られました。是を平家が察知して法皇を動かし、院宣と称して王の身柄引き渡しを要求して参りました。

当然ですが当寺院は平家の要求を拒んでおりますので、平家は軍勢を差し向ける筈で、正に当寺に破滅の危機が迫っております。どうか衆徒の皆さんには、この状況を御理解頂き、是非、ご助勢下さい。特に延暦寺と園城寺は宗門の系統が二つに分かれてはいますが学ぶところは同じで、是を例えれば鳥の左右の翼のようなものであり、かつ車の両輪のようなものです。どちらが欠けても其の損失は計り知れないものがあります。

其の様な次第ですから、特別な御配慮でご協力を頂き、当寺院の破滅をお助け頂ければ、是までの両寺院の対立や争いを水に流して両院が昔のように協力して繁栄することが出来るでしょう。

我々三井寺の衆徒一同はこの様に合議を致しましたので宜しく御配慮下さい。

治承四年五月十八日　　三井寺衆徒

現代の感覚で書き直したから、お願いする立場で表現しているが、原文では「頼む！」という感覚が薄い文章のように感じる。他人にものを頼む場合には、例え本心では無くても「美辞麗句的な敬語」を多用する必要があるのに、三井寺僧徒が出した手紙は「偉そうに」思われる部分があった。

南都牒状（なんとちょうじょう）のこと

果せるかな、三井寺から出された救援依頼を受け取った山門こと比叡山の僧兵たちは、日頃からの対立感情を崩そうとせず、先ず手紙の趣旨に反発をした。「三井寺は当山（延暦寺）の末寺で有りながら鳥の翼だの車の両輪だのと、対等のつもりで当山の格を低く見ているのは許せない…」と。

そもそも寺院は死者を弔う場所なのであるから格も上下も無い。本山だの末寺だのと言う制度は釈迦が興した仏教の趣旨に反するものだと思う。

つまり比叡山の僧兵たちは平清盛に睨まれることを恐れて反乱に加わらなかった、と解釈する。その上に、入道相国こと平清盛が天台宗のトップである明雲大僧正に「僧兵たちを鎮めるように」命じたから、明雲は山麓の官舎から山に登り僧兵たちに動揺しないよう訓示をした。その為に三井寺からの救援依頼は無視されることになった。

それでも心配な清盛は、近江国から獲れた米二万石と北陸地方の絹織物六千反を比叡山に届けて各宿坊に配った。それも突然に配ったから一人で数多く得た者もあり全く貰えない者も出た。是を皮肉って誰が書いたか次の様な落書きがあった。

「山法師（比叡山の僧）おりのべ衣薄くして恥をばえこそ隠さざりけれ」

また、絹を貰えずに、「おりのべを一切れも得ぬ我らさえ薄恥をかく数に入るかな」と詠む者もいた。

一方、三井寺から南都（奈良）に宛てた救援依頼状は次のような文面であった。

園城寺から興福寺寺務所へ（拝啓）

特にご協力ご援助を頂いて、当寺院の破滅を救助して頂くための書状。特に仏法が優れていることは王法を護るためであり、王法が長久なることは即ち仏法の為であります。ところが、前太政大臣平朝臣清盛公、法名浄海は、自分の思うが侭に国の威光を勝手にし、国の政治を私物化しており、その為に内外に恨みを買っており民衆は嘆き悲しんでおりました。

ところが今月十五日の夜、後白河法皇の第二皇子である以仁王が不慮の災難（平氏の迫害）を避けるために、当三井寺に入られました。それを知った平家は院宣（いんぜん＝法皇の命令）と言い立て以仁王を引き渡すように要求してきました。

我ら衆徒一同は断固として拒否をしましたが、清盛法師は武力をもって制圧するつもりですので当山の仏法、王法が破滅の危機に瀕しております。

其の昔、唐の会昌天子（えしょうてんし）こと武帝（八四三、第十二代皇帝）は、道教を信奉して仏教を滅ぼそうと、中国三大霊場の五台山（清涼寺）に軍隊を差し向けた時、清涼山の衆徒は合戦をして是を防ぎました。帝王の力で攻めても此の様なことですから、謀反悪逆の平家が攻めて来るのは断固として防がなくてはなりません。

特に奈良興福寺は藤原氏の氏寺であり、平家によって氏の長者である関白・基房公が罪無く流罪とされたことを恨むべきで、その仇を討つ機会は今回で

あると思います。願わくば、興福寺の衆徒の皆様、内には仏法の破滅を助け、外には悪逆に組する者たちを退けて頂く為にお力添え頂ければ共に喜びとする事が出来ます。

当山の一同、この様に決議を致しましたので、お願いの筋をお聞き届け下さい。

治承四年五月十八日　　園城寺大衆等

比叡山に出した手紙と少し違って、此方の方は苦境を曝（さら）け出しいるようなので興福寺の僧兵たちも気の毒に思い、また、平家に天下を取られたような藤原一族でもあるから興福寺側も平家憎し！の感情がある。次の様な返事を出した。

興福寺から園城寺に回答をします。

貴寺から寄せられた書簡に依れば入道浄海（清盛）が為に園城寺の仏法が滅ぼされる危機にあるとのこと。当時は法相（ほっそう）宗であり、貴寺は天台宗で、教義は違いますが経典に書かれている字句は、全て釈迦の説法から出ているものであり、奈良（興福寺）も京都（園城寺）も共に釈迦如来の弟子であることに変りはありません。

寺院相互に、仏教の敵が出現した場合には是を調伏させなければなりません。そもそも、清盛入道は平氏一族の、取るに足りない人物に過ぎず、一介の武士でしかありません。祖父の正盛が、藤原為房という五位の蔵人（天皇側近）の家に仕えていて、主が加賀国司であった時に検非違使にして貰い、白河上皇の寵臣であった藤原顕季が播磨国司の頃に、その下で働かせて貰っていたのです。その様な家系で有ったから、平忠盛が昇殿を許されたときには誰もが鳥羽上皇の失敗である、と噂をしていました。（巻第一、殿上闇討）忠盛が異例の出世で恰好をつけても、一般には成り上がり者と軽蔑をされていて、公卿に仕える身分の低い者にまで付き合いを拒まれていたのです。

それなのに、去る平治元年十二月に後白河法皇が戦功により破格の恩賞を与えて以来、清盛は太政大臣に昇り随身の兵まで付ける身分になって、其の子は男子が大臣の職を忝く（かたじけなく）し或いは近衛の将に連なり、女子は中宮の職にも備わり、准后の宣も受けています。多くの弟と庶出の娘たちも公卿に嫁ぎ、孫や甥なども悉く国司などに任じられているのです。それだけに止まらず日本国中に領地を広げ政府の人事を思うが侭にして国家の下級職員を家臣同様に扱っています。

その上に、少しでも自分の気に入らなければ誰構わずに是を捉え、言うことが気に入らなければ公卿であろうが容赦なく罰していて、そのために災いを逃れようと天子さえも清盛の顔色を窺う有り様で、藤原氏も礼を尽くすこと丁重です。また先祖から伝えられた土地でも平家に奪われることがあり、平家の権威を憚（はばか）って誰も苦情が言えず宮家の荘園でも例外では無いのです。

勝ちに乗る横暴は去年の十一月に、後白河法皇を御所から追放して鳥羽に幽閉し、関白を流罪にしましたが、この様な反逆の甚だしいこと誠に古今に例を見なません。それらの暴挙に対し、我らは賊徒に立ち向かって其の罪を問うべしと主張したのですが、或いは神の御意向を憚（はばか）り或いは天皇のお言葉によって決起が出来ずに歳月を過ごしてきました。

此の度、後白河法皇の第二皇子（以仁王）が兵を起こされ、何人かの武将が是に従ったという…その陣所に八幡宮三神（應神天皇、神功皇后、玉依姫）及び春日の大明神が密かに仮姿を表しますように、御乗物を差し向けて貴寺（三井寺）に着きますように、三井寺に鎮座する新羅明神にお願いを申し上げます。どうか王法が尽きないことを明らかにし給え。その為に三井寺に籠って戦う者たちは身命を顧みず寺を守護し奉る…その決意には心から感激しない者がありましょうか。

聞けば清盛の命令を受けた軍勢が三井寺に入ろう（攻略しよう）としているようです。それならば十八日の朝に大衆を催し諸寺院に通知して軍を揃えようとしていた折に、三井寺からの書簡が届いたのであり数日来の懸念が解消した思いです。

かつて中国清涼山の僧たちは、仏教を弾圧した唐の武帝の兵を撃退しました。（園城寺からの手紙にも記載されている）ましてや我が日本の南北両門の衆徒が、暴悪な平清盛の軍勢を追い払わずにおけるでしょうか。高倉宮以仁王を守護する陣を固めて、我ら興福寺の軍勢が到着するのを待っていて下さい。敵を恐れてはなりません。

治承四年五月二十一日　　大衆等

誠に心強い返事であり、三井寺も期待をしたのだが…世の中で調子が良すぎる話は要注意？

次の章段は「永僉議（ながのせんぎ）」つまり作戦会議が長引くことで、良い兆候では無い。三井寺に立て籠って高倉宮以下の運命や如何に…。　（続く）

編集事務局　〒315-0001
石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063
（白井啓治方）
http://www.furusato-kaze.com/

ギター文化館

朗読教室開講のお知らせ

「ふる里」とは、物語の降る里。

ふる里に降った物語を朗読劇に表現してみませんか。

ギター文化館では、音楽院としてギター教室、オカリナ教室を開校しておりますが、四月より新たに朗読教室を開校することとなりました。講師は、劇団「ことば座」を主宰する脚本・演出家の白井啓治。舞台表現としての朗読劇の基本を学び、名作物語や詩文、ふるさとの物語などを当館「やさとの丘ホール」で発表しませんか。
朗読劇は、一人での表現のほか複数人での表現もあり、友達や当館の音楽院に学ぶ方達とユニットを組んでの発表を愉しまれるのも良いのではないでしょうか。

・教室は、一教室３名程度。（グループ朗読は５名程度まで）
・受講料＝月一回コース：6,000 円、月二回コース：9,000 円
・教室日は、土曜日・日曜日を除いて応談で決めさせていただきます。
　※詳しくは当ギター文化館にお問い合わせください。

（講師プロフィール）

白井啓治＝大阪府出身。６３年演劇活動を開始。６７年映画に転向。６９年脚本/演出家として独立。８７年～０９年まで日本シナリオ作家協会会員。０６年ことば座を創設し、ギター文化館を発信基地として朗読手話舞劇「常世の国の恋物語百」に挑戦。現在３５話まで進行。

ギター文化館　〒315-0124　茨城県石岡市柴間431－35
Tel0299-46-2457　Fax0299-46-2628